

# ウイルスだけでない「黒い象」

早稲田大学大学院経営管理研究科教授 川本 裕子

金融市場では、確率は低いが発生すれば非常に大きな損失をもたらす現象を、大群の白鳥の中に潜む一羽の黒い鳥にちなんで「ブラックスワン」と呼ぶ。しかし、コロナ危機はブラックスワンとはいえない。世界的に流行して甚大な被害をもたらす感染症の可能性は、世界保健機関（WHO）など専門家からはかなり長きにわたる警鐘が鳴らされてきたからだ。皆わかっているのになぜか放りされる現象を「ブラックエレファント」と言う人もいる。象が部屋にいれば誰でもわかるはずだが、みんな見て見ぬふりをしているイメージだ。早晚、象は部屋にあるものを踏みつぶしてしまう。確実に厄災は我々に降りかかる。地球温暖化も、人類としての対

策が十分とられていない点ではある意味でブラックエレファントだ。太陽からの大量プラスチック放出現象もかなりの頻度で起こるようだ。影響が及べば電力網の停止装置が破壊され、社会が動力源を失う恐れがある。大型変圧装置の製造能力は限られた国にしかなく、復旧に長期間を要するという。火山の噴火も地球規模の気候変動をもたらす「黒い象」候補だ。1815年のインドネシア・タンボラ山の爆発は世界的な異常気象をもたらし、フランスのナポレオンがワテルローで敗れた一因ともされる。

もし富士山が噴火し、火山灰が3ヶ月積もって雨が降れば停電となり、3ヶ月で車両は通行困難になるという。内閣府の中央防災会議で定期的に議論されているが、民間レベルを含めて十分な準備にはつなげていない。また、市街化調整区域での建物建築は大きなリスクだが、最近の水害で認識されるようになったばかりだ。

電気自動車（EV）へのシフトが叫ばれ、長期的にはガソリン車に取って代わるとされる。しかしEV100%となった場合、送電網が長期にわたり機能不全になれば生活はマヒする。蓄電池やガソリンエンジンなどの選択肢があることは、危機への備えになる。

ブラックエレファントは我々の身近にいる。「今そこにある危険」を放散せず、生き抜くための多様な選択肢を準備することが欠かせない。国民生活でも企業経営においても教訓となるだろう。